

財界にっぽん

創刊45周年

2014 4



表紙の人 斎藤要一・東京都知事
阿部日頭が潰した日蓮正宗 ジャーナリスト 坂口 義弘

「為政の責任」として取り組むべき 最先端原発リカバリ―技術の確立!

鈴木 淳司

自由民主党政調会長補佐



〔すずき・じゅんじ氏のプロフィール〕昭和33年、愛知県瀬戸市生まれ。早稲田大学法学部を卒業後、松下政経塾に入塾（3期生）。平成3年、瀬戸市議会議員に初当選し、2期8年務める。平成15年、比例東海ブロックにて初当選。平成17年、愛知7区から2度目の当選。福田康夫内閣、麻生太郎内閣で総務大臣政務官。平成21年の総選挙で落選するも、平成24年暮れの総選挙で3期目の当選を果たす。現在、衆議院経済産業委員会理事、自民党政調会長補佐などを務める。

消費増税を乗り切るため
成長戦略の実現に注力

安倍政権のこの1年間は、アベノミクス
がある程度功を奏し、日本経済の先行きも展
望が開けてきた感じがありますね。

鈴木 株価に多少の変動はありますが、第2次安倍内閣の1年は、基本的には順調な流れだったと思います。一昨年12月の組閣以来、日本の空気が変わりましたね。明るくなりましたが、景気は一種の「氣」ですが、「氣」が変わったということを強く感じます。長く続いたデフレ、景気低迷からの脱却が狙いでですから、そう簡単にはいきませんが、経済界をはじめ国民全体の気持ちが前向きになつたことは大きいと思います。

アベノミクスでインフレになるのではないかと心配する人もいますが、安倍総理は面白いことを言っていました。「日本経済は長期デフレというバンカーに入っていた。それをインフレを怖れて、いつまでもバターで出そ

から自分たちは勇気を持ってサンドウェッジを持ったんだ」と。言ひえて妙だと思います。

——政治リーダーとしての責任において、ひとつ決断をしたということですね。

鈴木 アベノミクスについては、今後の課題もたしかにあります。しかし、とにかく第一

弾、第二弾はうまくいったと思いますし、これから第三弾の成長戦略をいかに推進し、実現するかが大事だと思います。

——4月には消費税が8パーセントに上がりますが、影響はあるでしょうかね。

鈴木 消費税率の引き上げについてはいろんな意見がありました。一方には、もう少し景気回復が定着してからという意見がありましたが、一方には、税率引き上げが内外ではすでに織り込み済みの認識となっている段階で、もしそれを1年先送りすれば逆にデメリットもあるという意見もありました。そうした意見を勘案しつつ、厳しい道ではありますが、総理はあえて消費増税に踏み切ったわけです。

だからこそ、2月初めに国会で補正予算を通すなど、さまざまな手を打っているのです。戦略の実現に力を入れるべきなんです。

——今後の日本経済を考える場合、エネルギー問題、とりわけ原発再稼働問題、原発事故対応問題が大きなハードルになりますが、鈴木さんは衆議院の原子力問題調査特別委員会の理事でいらっしゃいますね。

鈴木 経済産業委員会の理事の他、原子力問

題調査特別委員会の筆頭理事を務めていますが、これが大変なんですよ。普通の委員会は相手が内閣・閣僚であるのに対し、この委員会は性格が違います。福島第1原発の事故をうけて国会に事故調査委員会が設置されました。その報告書でさまざまな問題点の指摘がありましたが、ひとつの問題提起として、国会の中に常時、原子力規制のあり方を監視する常設の委員会を設置すべしとする提言があり、それを受けて原子力問題調査特別委員会が設置されたのです。したがって、私たちの相手は閣僚ではなく、3条委員会として独立性の高い原子力規制委員会の田中俊一委員長という珍しい委員会です。ちなみに私の前任者は塩崎恭久さんです。塩崎先生が予算委員会の筆頭理事になられたので、私に重責が回ってきました。大変な使命をいただいたと、ひしひしと責任を痛感しています。

日本は世界最高水準の原発リカバリーテchnique

——国会が総力を挙げて原子力問題に取り組むわけですね。

鈴木 原子力についてはさまざまな考え方がありましたが、この委員会は与野党対決の委員会ではなく、原子力規制のあり方を監視し、いかにして適正な規制体制を確立していくかにして適正な規制体制を確立していく必要があります。つまり、今後の原発施設など、核燃料サイクル関連施設ができるまで、各原発はすでに使用済み燃料を持っているから、これらをどうするかという問題は厳然としてあります。つまり、今後の原発の稼働を止めたとしても、使用済み燃料は冷却し、保管し続けなければなりません。もしくか、党派を超えて議論を重ねながら追い求めていくところだと思っています。私は経済産業委員会でも原子力問題に関わってきました

た。また昨年の汚染水問題の閉会中審査では、理事として自民党を代表して東京電力の廣瀬社長に質問しました。なぜか最近、原子力問題との縁が深まっています。

——原発再稼働問題では、自民党は再稼働容認論ですかね。

鈴木 一概には言えませんが、私個人の意見を言えば、中長期的に原発の比率を低下させていくことは、共通認識としてあると思います。再生可能エネルギーを最大限追求していくことは不可欠です。ただ現実問題として、いきなり原発ゼロに持っていくことには無理があります。責任あるエネルギー政策としては、きわめて高い安全性を確保した上で、地元の了解を得ながら原子力発電を一定量稼働させ、その間に並行して再生可能エネルギーの開発に注力し、次第にその比率を高めていくのが現実的ですね。自民党議員の多くはそういう意見だと思います。

ただ、原発は「トイレのないマンション」と言われるよう、仮に今後の稼働は止めるとしても、各原発はすでに使用済み燃料を持っているから、これらをどうするかという問題は厳然としてあります。つまり、今後の原発の稼働を止めたとしても、使用済み燃料は冷却し、保管し続けなければなりません。もしくか、党派を超えて議論を重ねながら追い求めていくところだと思っています。私は経済産業委員会でも原子力問題に関わってきました

では、これまで原発を稼働させてきた以上、これからも責任を持って付き合っていかざるを得ないわけです。もはや単なる原発反対のスローガンで済む問題ではなくなっているのです。

——安全に廃炉にもっていく技術を含めて、原発関連技術の新たな開発に取り組んで行かなければならぬということですね。

鈴木 日本は原発事故を起こしてしまった以上、原発事故をリカバリする世界最高の技術を持たなければダメです。その最高レベルの技術がなければ、今後どんどんその必要性が出てくる廃炉の作業にも対応できないし、もし他国で原発事故が起きたときに何の対応策も打てません。原発再稼働いかんにかかわらず、その制御も含め、日本は世界最高水準の原子力関連技術を持つ必要があるのです。

——それは原発事故を起こしてしまった日本の責務ですね。

鈴木 私はそこに「為政の責任」ということを感じます。為政の責任として原発から目をそらすわけにはいきません。私自身、今

後も原発問題に正面から向き合っていくつもりです。昨年夏の参院選のとき、私は政調副会長として高市早苗政調会長とともに、産業界の団体に公約の説明に参りましたが、産業界の方々が一様に言われたのが、「とにかく安価で安定的な電力供給を確保してほしい」。

そして、世界の企業と同じ条件・イコール・フッティングで競争させてほしい。あとは産

業界の自分達ががんばるから」ということでした。それを聞いて、まさに政治の役割とは、民間の人たちに「あとは俺たちが頑張るから」と言ってもらえるだけの環境をどう作り上げるかだということを改めて認識した次第です。

日本のすべての子どもにタブレットを持たせたい

——鈴木さんは自民党の教育再生実行本部の副本部長として、教育改革を担う立場でいらっしゃいますが、教育改革にはさまざまな方針が相次いで打ち出されていますね。

鈴木 教育再生実行本部は総裁の直属機関です。ちなみに現在の本部長は文部科学副大臣経験者の遠藤利明さんで、前の本部長は現文部科学大臣の下村博文さんです。安倍総理からは、「高めの球を投げてこい」と言われています（笑）。要するに、議論になるような問題提起をしろ、ということだと理解しています。

鈴木 私はそこに「為政の責任」ということを感じます。為政の責任として原発から目をそらすわけにはいきません。私自身、今後も原発問題に正面から向き合っていくつもりです。昨年夏の参院選のとき、私は政調副会長として高市早苗政調会長とともに、産業界の団体に公約の説明に参りましたが、産業界の方々が一様に言われたのが、「とにかく安価で安定的な電力供給を確保してほしい」。そして、世界の企業と同じ条件・イコール・フッティングで競争させてほしい。あとは産

推進でした。

——昨今、ICTを活用した授業が、義務教育にもかなり広がってきているようですね。

鈴木 ICT教育の実態は現場を見ないとわからないということで、各地の小中学校を視察しました。一部には携帯やスマホ、ネット

の負の側面を懸念する声もありましたが、実際に現場を見てみると、ICTを使った授業では、子どもたちの目が生き生きと輝いているんですね。中でも印象深かったのは、横浜の附属中学校で、体育のバレーボールの授業にICTを活用していた時のことです。端末のカメラで撮影したさまざまな映像を見て、生徒たちは単に客観的にサーブ、レシーブの技術を学ぶだけではなく、試合上、より効果的なフォーメーションの在り方をグループで一緒に研究し始めるなど、皆が楽しそうに勉強していました。タブレットはまさに自発的な学びを補完する強力な道具ですね。

現在、ICT授業については、総務省も文科省もまだまだ試行段階に近い状況ですが、早く全国的に広げていきたいと思います。これは高めの球ですが、私たちは提言の中で「2010年代末までに、すべての子どもたちに1人1台、タブレットを提供すべし」と提案しました。ただ、タブレットと電子黒板を使って、どう教えるのかについては、教師の力量が問われることになります。

——中高年の先生には難題が増えますね。

鈴木 私の地元の愛知県大府市立東山小学校

のICT授業も視察しましたが、小学生が実際に楽しそうにICTと向き合っており、頼もしく感じました。今やICT授業は国際的にも大きなトレンドになっており、OECD（経済協力開発機構）が実施しているPISA（国際学習到達度調査）も、コンピューターを使うことを前提に行われています。したがって、タブレットやネット環境なしの授業は、もはや時代遅れとなりつつあります。現場の先生方にも、ぜひ頑張っていただきたいと思います。

童謡・唱歌は德育・情操教育の一環でもある

——最近、道徳を正式な教科として位置づけるという議論が出ています。これについて、

鈴木さんの見解はいかがですか。

鈴木 道徳を教科にするといつても、点数を付ける教科ではありません。ただ、道徳はいろんなことを考える前提になるものであり、道徳を教科にすることによって、教師の人間力や姿勢が問わることになるでしょうね。

私たちの子どもの頃を思い出しても、先生の価値観や興味、関心から、いろんな世界に入っていますね。

ただ、私は個人的には、道徳をひとつの科目に位置づけるのも結構ですが、同時に古くから日本の童謡・唱歌・愛唱歌を大事にすべきだと主張しています。童謡・唱歌・愛唱歌の中には、日本の自然の美しさや、社会に対する感謝の気持ち、他人に対するやさしい心といったものが、さりげなく歌い込まれています。ことさらに「道徳」と言わ

なくとも、日頃から童謡・唱歌・愛唱歌を大切にする環境の中で、自然に道徳の素養は身につくと思います。だから私は、日頃から「童謡・唱歌・愛唱歌を大切にしよう」と訴えています。



原子力特別委員会で質問する鈴木議員

鈴木 まさに。日本の原風景があそこに歌われていますね。今はもう失われてしまつた原風景かもしれません、あの歌に込

められた原風景に対する愛着や郷愁の念は、現代にも通じますよ。

——昨今は尖閣諸島や竹島をめぐる領土問題

で、日中関係、日韓関係が険悪化していますが、教科書に日本固有の領土であることを明記すべきだ、という意見も強いました。マスコミを中心に反対意見も強いですが、鈴木 自国の領土を教科書などに明記することは、どの国でも普通に行われていることです。日中・日韓が対立しているから「書くな」或いは「書け」という問題ではないと思いま

す。本来ならば平時から普通に行われていてしかるべきことです。それが長年、きちんと行われてこなかつたことこそ問題なんです。それを改めて明記するについては、いろいろ工夫する必要がありますが、デリケートな時期だから触れない方がいい、という議論はおかしいと思います。

鈴木さんは日本の教育の目指すべき方向を、どうお考えですか。

鈴木 平均的に成績のいい子をつくるより、「尖った」子と言うと語弊がありますが、何か一芸に秀でた子を育てたいね、という議論をしたことがあります。早い段階から得意分野を伸ばしながら、ものづくりや農業を目指したり、机の上での勉強以外のことにも価値の置ける子をつくりたい、という考え方もあります。そういう意味では、学校の成績を重視するだけの画一的な教育ではダメで、職業観を身につけるような教育も必要だと思います。

それから、私は教育の要点は、システムより人だと思います。教育する側の人材が大事なんですよ。私は政治の道に入りましたが、実は私の家族や周辺には教師が多いんです。

だからこそ言うんですが、教師の皆さんにはぜひ「聖職」としての気概を持つて教育にあたっていただきたいと思います。現在の日本の教育界は、現場で懸命に努力している教師がなかなか報われない側面も多々あります。私達は「頑張っている学校、頑張っている教師」をしっかりと応援していくつもりです。遠藤利明さんをトップにして活動している「頑張る学校応援団」は、まさにそれが狙いであります。私もその一員です。

アベノミクスの正念場は 地方と中小企業の活性化

——鈴木さんは瀬戸もので有名な愛知県瀬戸市のご出身ですが、景気はいかがですか。

鈴木 焼き物業界は依然として厳しいですよ。円高のきっかけになった1985年のプラザ合意の前までは、瀬戸物の業界も洋食器や陶器の形の輸出が好調で、活気がありました

が、その後の円高で一気にダメになりました。ライフスタイルの変化の中、日用雑器の販売も低迷しており、かつての盛況時の面影はありません。それに加えて最近は燃油高で、「物は売れない、コストは上がる」で大変です。

——アベノミクスは都市部の大企業には恩恵をもたらしましたが、地方や中小企業までは

及んでいないという見方もありますね。恩恵が地方や中小企業まで波及しなければ、アベノミクスは早晚挫折するのではないかとも言わわれています。

——ものづくりやアーケード改修関連の補助

金などは、地方や中小零細企業のニーズをすくい上げる点でも有効でしょうね。

鈴木 切実な現場の声は政策づくりの大きなヒントになります。また、ものづくり補助金の新たな新しい施策を打ち出すことによって、これまでのものづくりや町おこしに関わったことがないような人たちが、新たな提案を持つてトライしてくる。そうした地方からの提案を中小企業庁に上げれば、より効率的に政策のプラスシューアップができると思います。

地方の現場の声を拾い 国会議論に反映させる

——さて、鈴木さんは松下政経塾の3期生で、松沢成文さん、樽床伸二さんらと同期ですね。政経塾時代の仲間との交流はありますか。

鈴木 松下政経塾出身の国會議員が、与野党を問わず名を連ねる「未来政治研究会」という会があり、今、私が会長を務めています。国会の会期中に折に触れて会合を持ったり、時には現役の塾生とも交流したりしています。メンバーは与野党に別れていますが、同じ釜の飯を食つた同窓ですから、集うときには政治的立場は離れて、和気藹々と交流しています。先日の会合には、政経塾出身者で初めて総理大臣になった野田佳彦さんも参加して

し、賑わいの復活に再チャレンジしていただき、再び元気にがんばってもらえるようにする。是非とも成功させたいものです。

くれました。与野党の議員が集つて和気藹々とひとときを過ごすことができるというのは、私たちの大きな財産だと思います。

——松下政経塾出身の政治家の皆さんは、与野党に別れていても、政治理念とか国家観といった部分では、それほど大きくかけ離れているわけではありませんよね。

鈴木 それぞれの選挙区事情等から、国会への出方が違つていただけで、本質的な価値観はそんなに違わないと思いますね。極端なことを言えば、現在野党にいる人たちの中にも、



日本経済再生本部会合に政調会役員として出席（左から5人目）

もし自民党から出られれば出たかったという人が、実はたくさんいると思いますよ。

——鈴木さんは今後、どのような政治家でありたいと思われますか。

鈴木 昨年から政調副会長・政調会長補佐をやり、政策作りの最前線を目の当たりにして、ああこうして法律とか制度ができていくんだなということを、改めて実感しました。そこ

で思うのは、もっと実力を身につけたいということと、地方議会の出身者として現場の真の課題をもつと的確につかまなくてはダメだということで、最近その必要性を痛感しています。というのも、省庁の作る法律原案など、一見全国各地に適応するような整ったプランニングになってはいますが、実はそれは机上の論理の部分が大であって、地方の現場に帰ると実情とは違うことが少くないのです。地方出身の議員として、そのギャップを埋めるべく、もつともっと地方の現場の生の声を拾い、政策や法案づくりに反映させることで勝負をしていきたいと思い、その責任の重さを再認識しているところです。

——一昨年暮れまでの3年4カ月間、臥薪嘗胆の時を過ごされました。その間、民主党政権をどのようにご覧になつていましたか。鈴木 他党の批判をするつもりはありませんが、「為政の責任」を改めて再認識しました。民主党政権はそれが希薄だったのだと思いました。政治は「いいかっこしい」ではダメです。その場限りの無責任さでは政治はできないと

いうことを、民主党政権から学んだ戒めとしています。その意味では、現在もなお、日本が置かれている危機的状況を国民にストレートに伝えきれない気がします。この国が直面する課題を的確に認識することがすべてのスタートだと思います。

高齢者が増え続ける一方、人口は減少の一途を辿っている。経済的には成長するアジア諸国との激しい競争の時代に入っています。こうした状況下で、日本が今後とも繁栄の中で今の福祉社会を維持していくためには、やはり経済が強くなくてはいけない。経済を強化するためには投資も必要だ。そうしたものをしてトータルで確保するためには、何が必要なのだろうか。

——何が必要ですか。

鈴木 レイモンド・チャンドラーのハードボイルド小説に出てくる私立探偵、フィリップ・マーロウが言う「強くなければ生きていけない。優しくなければ生きていく資格はない」という有名な言葉があります。これぞまさしく日本の目指すべき姿でしょう。もし我が国が経済の競争力を失えば、福祉は維持できません。だからこそ今、私達は強い経済の再生を目指すアベノミクスの成功に取り組んでいるのです。私は町の零細な鉄工所の息子です。庶民の出身ですが、国家社会の再生を目指す氣概だけは心に秘めて、全力で頑張っていきたいと思います。

（聞き手・構成／江口敏）